不二

六月号

尾崎士郎の文学精神……胡蘭成
民族派の文学運動と倉田百三……影山正治

大東塾・不二歌道会

昭和四十年六月二十日印刷
昭和四十年六月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可

不二第二〇巻第六号　通巻第二〇五号（ひむがし通巻第二五巻・第三四九号）定価八十円

影山正治著

民族派の文学運動（上）

B6判上製　四三〇頁　定価六〇〇円　〒一二〇円
（大東会館維持会員は二割引）

本書の出現は、戦後二十年の文学と思想の歴史観の上に必ずや大きな転換をもたらすであらう。

週刊読売　書評より

保田与重郎、浅野晃氏などとともに、戦時下日本の右翼批評家として著名な著者が『千里行脚の記』以来の沈黙を破つて出版した民族主義の立場に立つ評論集である。周知のように、右翼批評家といえば、戦後とくに評判が悪い。ダンガイ者の急先鋒が杉浦明平氏だつた……それが二十年たつて、やつと反論の機会をもつに至つたわけなのである……政治家としてのおのれの底に詩人をもつ自由人なので、それが無意識のうちに、ヒューマンで正義派的な鋭い批判力になり、党批判やパステルナーク問題等に関して独自な立場をとらせている、と。これは、杉浦（明平）氏の多少ヒステリックな日本ロマン派批判にくらべると、かなり幅のあるものの見方である。

道統や尊皇等土着の日本主義についても意外と狷介（けんかい）な言辞を弄（ろう）していない。戦後二十年の歴史反省がそうさせたのか、それとも影山氏の円熟がそうさせたのか、私にはよくわからないが、かつては札つきの日本主義者だつた氏が、自説をまげず、しかも年輪を感じさせる平静な語り口で、日本ロマン派や周辺の文学事情を客観的に扱うたこの本の価値は、資料的にみてもかなり高い。（五月二十三日号）

編輯後記

○影山主宰著『民族派の文学運動』は各方面で非常な反響を呼んでゐる。本号にはその一端を紹介した。本書の出現は戦後二十年の文学と思想の歴史観の上に大きな転換をもたらしつゝある。販布に一層の御努力を御願ひする。

○西村公晴兄の「伴林光平先生のこと」、佐々木奎文兄の「一億号泣の碑」は誌面の都合で約四分の一を割愛した。御諒承を得たい。

不二　第二〇巻第六号
昭和四十年六月廿日印刷
昭和四十年六月廿五日発行
（毎月一回廿五日発行）
東京都港区青山北町五の二四の一〇　編輯兼発行人　鈴木正男
東京都港区青山北町五の二四の一〇　印刷所　大東塾印刷部
東京都港区青山北町五の二四の一〇　発行所　大東塾・不二歌道会
振替東京一九〇四〇一番
電話青山（四〇）〇九六三番

六月三日、佐藤首相は、内閣改造を完了、直ちに参内して、新閣僚の認証式を終つた。どの閣僚もみな晴れやかに、夫々の抱負と決意を披瀝して、第一歩を印した。

即ち佐藤首相は、改造直後の記者会見に於て、「経済成長や物質的な繁栄だけでは、どうにもならない、何か精神的な問題があるやうに感じ」「人心を新たにする」ために、内閣改造を決意した旨を語り、且つ「政治家自身が襟を正して責任の所在を明らかにすること」の必要を強調した。その後の初閣議でも同様であつたと聴く。

不況倒産、汚職腐敗、奢侈堕落、赤魔の浸蝕、加えて外患交々至る、曾て日本が歩いて来た、いつの日かを想はせる様な国艱の中にあつて、「人心の一新」「責任政治の確立」を期することは、一応尤もなことであり、そのこと自体別に問題はなからう。だが、問題は、その問題でないところにあるのだ。手のひらで撫でてゆく様な、通り一遍の政治そのものに国民は厭き厭きし、禁じ難い痛憤を味はされて来たのである。

われわれ国民が、聴きたいのは、佐藤首相及びその内閣の、単なる善意や良識ではない。その善意や良識が、どこに徹し、どこにつながつてゐるかである。

例へば、認証式を受けた閣僚のうち、何人が、果して真に「認証」の意味を痛感しただらうか。「認証」は単なる形式ではない。「認証」とは、国のいのちにかけ、民族の悲願にかけ、萬世一系の神霊にかけて、執り行はれる、上御一人の御委任にな他らない。天業輔弼の大責任を負荷あそばさるゝものである。この御認証なくして、誰人たりとも、天下の政治に参ずることは不可能であることを、痛記すべきである。この点、「認証」を単なる形式と心得た輩たちは、それがどんなに善意善政であらうと、忽ちにして、幕府を形成し、自滅した。まことに人意人力のはかなさである。責任もまた、個人的相対的責任ではなく、天業に対する責任であり、天下の政道に対する責任である。この点がわからなければ、紀元節の意義などわからう筈がなく、況んや時艱克服など、思ひも及ばぬことである。さもあらばあれ、われらは飽くまで草莽の民である。断じて楠氏孤忠の道を往くであらう。（H）

不二

第二〇巻・第六号

詠草

茶を摘む……影山正治（二）
つゆ青葉……影山銀四郎（三）
大丈夫の道……原真弓（二）
月、酒、夢抄……小山寛二（三）
神太鼓……長谷川幸男（三）

尾崎士郎の文学運動……胡蘭成（四）
民族派の文学運動と倉田百三……影山正治（六）
一億号泣の碑に就いて……佐々木奎文（一一）
伴林光平先生のこと……西村公晴（一七）
満洲事変の断面……語り手 桜井徳太郎 聞き手 影山正治（一五）
『民族派の文学運動』書評・感想抄……（二八）
「大東亜戦争肯定論」の研究（三）……（三二）
佐野一彦著『永遠の回帰』……村上清（三六）
物故同志遺詠集（二）……（四五）
〈推薦図書〉大アジア主義と頭山満……（四六）
日本の声……（四七）
道友通信……（四八）
不二歌壇……長谷川幸男選（三九）

表紙……中野清韻画

『民族派の文学運動』書評・感想抄

京都大学新聞

一、実をいえば、私の書いた『日本浪曼派批判序説』なども、利用した資料からいえば実に貧弱なものであつた。私はあの全体をもとに小序論として、もつと「研究」らしい形にまとめあげたい。そのためには、もつと多くの資料を集めたいと思つたことはある。そうした気持がどこかにのこつていた折から、こんど大東塾々長によつて、これほどゆたかな資料を含んだ昭和の民族主義文学史が書かれたのを見て、私は少なからずおどろかされた。そこには、私が知つており、もしくは推定したもののほかに全く予想もしなかつたような事実がおびただしく収録されている。

一、しかし、私のおどろきは、たんに著者が多くの民族主義文学資料を丹念に収蔵しているという事実だけではない……それよりも、私は前述の意味での現代史（たとえば、日本のロマン派についていえば、保田与重郎にも、亀井勝一郎にも、芳賀檀にも浅野晃にもその記述がない）が、影山氏の手で書かれたことにやや意外の感をいだいたのである。

一、もちろん、私は神兵隊事件までの氏の自叙伝というべき『一つの戦史』を知つている。氏の文章が、いわゆる右翼者中抜群のものであることも知つている。しかし、むしろ私には歌人影山のイメージがつよくこれほど一貫した歴史記述を行いうる人として実はあまり予想しなかつた。こんなに明確に民族主義闘争運動史を描きうる人がいたのなら、どうしてもつと早くそれを発表しなかつたのかと、いささか残念に思つたほどである。つまりそうであれば、私は日本ロマン派の再検討を、もつと広般、確実な背景のもとに、もつとらくにすすめることもできたであろうに、というなどの意味である。本書について、竹内好氏が「史料を保存し、公開する第一要件を充たしている点で著者は歴史家であります」といつていることに、私は全く同感である。

一、影山氏の歴史家としての慎重さは、その論述の態度にもあらわれている。当然、この書物は、全体としてマルクス主義・近代主義の文学史記述に対するポレミークの意味をもつているが、そのさい、しばしば右翼文人に見られる怨恨・嫉視のかげを全くとどめていない。人間と歴史の事実を談々と記述し――神の裁断をまつというとらわれない趣があり、時として論敵をやゆする調子にも、むしろ甘いとさえ思はれる慈味がある。これは、しかし左右の論客、一般の評論家を通じて稀なことであろう。

一、さてこうした著書の性格から一般に昭和文学史にどのような事実と観点が新につけ加えられることになつたかについて、詳細なリストを作ることは今私にはそのゆとりがない。これは誰か専門の文学史家に吟味し、整理してほしいところである。

一、ただ、すぐにもいえるかと思うことは昭和の民族主義文学史がほとんど初めてその基礎研究のための路線を提示され、そのために必要なデータ、もしくはその所在の

明示を与えられたということである。

一、とくに本書第五章以下に記された種々の史実は、たしかに昭和文学史の当該部分の訂正なり、書きなおしを要求するはずである。私が先の短文で「たんに政治に、もしくはたんに文学に」とらえられていては決して理解されえないといつた意味は、ほぼそうしたことがらに関連する。さらにいえば、プロレタリア文学史・文壇文学史とともに、こうした文学運動の歴史があつたことを、昭和史全体の展望の中に、正しく位置づけることは、こんど、むしろ一般歴史家の課題であるとさえいえよう。（抜抄・筆者文芸評論家橋川文三）

週刊読売

一、保田与重郎、浅野晃氏などとともに、戦時下日本の右翼批評家として著名な著者が『千里行脚の記』以来の沈黙を破つて出版した、民族主義の立場に立つ評論集である。

一、周知のように、右翼批評家といえば、戦後とくに評判が悪い……これに対し影山氏らは一言も抗弁せず、また抗弁のできるような時勢でもなかつた……それが二十年たつて、やつと反論の機会をもつに至つたわけなのである。

一、政治家としてのおのれの底に詩人をもつ自由人なので、それが無意識のうちに、ヒューマンで正義派的な鋭い批判力になり党批判やパステルナク問題等に関して独自な立場をとらせている、と。これは、杉浦氏の多少ヒステリックな日本ロマン派批判にくらべると、かなり幅のあるものの見方である。

一、道統や尊皇等土着の日本主義についても意外と狷介な言辞を弄していない。戦後二十年の歴史の反省がそうさせたのか、それとも影山氏の円熟がそうさせたのか、私にはよくわからないが、かつては札つきの日本主義者だつた氏が、自説をまげず、しかも年輪を感じさせる平静な語り口で、日本ロマン派や周辺の文学事情を客観的に扱つたこの本の価値は、資料的にみてもかなり高い。（抜抄・文芸評論家日沼倫太郎）

新日本春秋

無謀な登山者の暴挙を戒めることはいとやすいが、彼等の歩いた危険な経路をも踏み分けて、正しく安全な道に救出するには豊富な経験と痛切な愛情、そして異常なまでの根気、根性を必要とするであろう。それらの条件を具備して、その努力を敢てしたものがこの著というべきである。

そのことは、序章の「杉浦明平論」四十三頁にわたる周到の叙述だけを見ても首肯される。この一章を白眉というは当らぬかも知れぬが、全巻の底流をなすズシリとした真実を踏まえた気構えと、あくまでも追及してやまぬ資料の豊富さは、対者をして顔色なからしめるというよりも、むしろその人間愛（日本人愛）に胸打たれしめるであろう。

著者は自らいう如く、〝戦闘的日本主義者〟であり、波乱の半生をたたかい抜き、なおたたかいつつある実践日本主義一方の指導者である。然も祈り深き求道者として民族派文学の修理固成に挺身し、歌人としても独自の境地を開いた多面性の持主である。豊富な経験に織りなされるこの種の著述は、やゝもすれば回顧趣味と誤解される嫌いがあるが、これは依然として〝たたかいの文学論〟であり、無謀な雪崩遭難者たちに対する救出運動でもある。なお今更いうまでもないことであるが、日本民族の伝

統を正しく奉行せんとしたすべての真実なる民族主義者が、戦前戦中を通じて、便乗どころか時の権力者にいかに迫害・弾圧されたか、そして今日なおいかなる苦悶・苦闘を甘受しつつあるか、真実のけわしさをしみじみと思い知らされるのである。（抜抄）

神社新報

著者影山正治氏の切実な体験が裏づけとなつてゐるだけに、単なる歴史の書でない迫力を持つ点が、本書の大きな特色である。「日本浪曼派」に対する評価の問題が大きく取り上げられつつある今日、文学に関心のある者はもちろん、さうでない者にも現代史理解のために一読を勧めたい書である。（抜抄）

評論家　**保田與重郎**

第一　影山さんのこの努力に対し、又その情熱の発する所以に私はただただ驚き恐れ入るといふ表現しかありません。この時代のことは、いやが上にも正確にする必要があり、又この正確に立つた行動を、けふの我々が実践せねばならぬと思ひます。私は著者の記憶力と配慮に感心しました。

第二　本日拝受、本になつてみると雑誌所載中とかはり一層記録的な調査的な面が出て来て――公私多忙中にかゝはらずよくもこんなもの作つたことよと、ただ〳〵感心を重ねました。「えらい男だ」といふのがまことに失礼な表現ながら、おしつめた感慨であります。深謝々々。

詩人　**田中克己**

第一　的確なる史料であるとともに、名文にて読者を動かすこと多大と信じます。

第二　御力作御恵与下され恐縮いたしました。よみゆく中に興尽くることなく青年覇気と申しますか、正義感のあつたころなつかしく存じました。

評論家　**浅野晃**

第一　著者は昭和維新を目ざして悪戦苦闘して来た自己の足跡を回顧しつつ、いはゆる日本浪曼派の文学運動を、その周辺と、その背景とにまで、周到な考案を試みてゐる。

第二　只今は待望の御高著「民族派の文学運動」を私にまで御恵投下されまことに忝く心から厚く御礼申上げます。早速拝誦して居りますが、何遍拝読しても興味津々としていろいろの記憶が次々とよみがへり巻を措く能はざるものがあります。

作家　**林房雄**

影山正治氏が戦中、戦後の思想と文芸に与えた影響は改めて評価されなければならぬ。氏自身、すぐれた歌をつくるが、しかし、歌人、文学者として評価されることは好まないであろう。どこまでも大東塾頭であり、「神兵隊」の道統を守つているところに氏の本領がある。その点、文学の境界から一止もふみ出し得ず、ふみ出すことをすでに断念した私にとつては、ただはるかに仰ぎみる高峯である。故尾崎士郎にとつても、そうであつたかもしれぬ。

評論家　**竹内好**

史料を保存し、公開する第一要件を充している点で著者は歴史家であります。その結果としてイデオロギイと歴史とを混同する風潮に批判を加えている点で、著者は批評家でもあります。

国学院大学教授　**安津素彦**

これで戦後の思想史を扱つた一郎の戦後のものは大きく書き改められよう。

作家　**今東光**

影山正治氏の労作『民族派の文学運動』

御上梓を知り欣快に堪えません。一層この道を逞ましく進まれんことを期待して止みません。

作家　**宮本幹也**

日本固有の神道の精神を基礎とした復古運動こそ、日本ならではの浪曼主義文学運動でもあつた。それが敗戦によつて歪められはしたものの、正しい姿として伝へらる日が遠くない筈である。その第一弾が影山正治氏の『民族派の文学運動』であることは云ふまでもないところである。

作家　**小山寛二**

ああいふ激動期にあつて、権力と対立し常に身の危険にさらされてゐる場合、日記はもとより、多くの関係書類は消滅するのが普通である。私のやうに怠堕な者でも、その点にば注意して、些か難を免れたことがある。影山氏が充分にそれを顧慮した上で、尚完全に近いまでに資料を残された努力には尋常ならざる苦心があつたにちがひないと想像するが、その努力の根柢に横たはる信念は何であつたか？想うて此処にいたる時、民族の歴史をわが一身の血肉に生かしきつたその凄さまじいまでの情熱と、毅然たる予見の正確さに圧倒されずにはゐられない。辿り来たりし足跡を凝視することは、未来へ向つて踏み出す決意の姿勢をとることである。あの敗北喪心の廃墟の上に立つて、今日の日を必らず招来させると確信を以て誓つた者が何人ゐたであらうか？真のますらをとは、また予言者の謂ひでもあらうか。然らばこの書はまた未来の歴史展開への暗示と示唆を深くひめてゐる、と考へてよい。その意味からでも、ただに日本文学の脈流の一断面の記録としてだけでなく、この書はぜひとも後世に残されねばならぬ貴重な文献であると思ふ。

神戸商船大学教授　**佐野一彦**

さてこの度御高著私にまで御恵贈たまはり御好情忝く存じあげます。毎月不二誌上にて拝読致しました御著作いま一巻にまとまり改めて感激ふかくよみかへしました。直く清き御姿のきびしさのかたはら如何にも温いお人柄に世人もなつかしむ事でございませう。昭和の思想史の正しき道が明らかになります事、申すまでもありません。私などの知らぬかず〳〵の事実についてもあまたの御教へを得ました。花も過ぎ野山に若葉かをるけふこの頃この御高著にましほの思ひでございます。

文学博士　**栗原健**

この度は影山塾長先生の名著『民族派の文学運動』を御恵贈たまわり、まことに有難く存上げます。もとより諸氏の推せん通り、得難き貴重書でありますとともに国学院大学時代の学友といたしましてまたまことになつかしさを覚えます。

学生　**樋口チヅ子**

私は明治大学大学院の日文で「日本浪曼派」を専攻していますが、先日指導教授の平野謙先生にすゝめられて貴方の「民族派の文学運動」を購入いたしました。まだ読み始めたばかりですが、一口にいつて大変おもしろく、私の勉強にとてもためになります。これ迄私はプロレタリア文学の系統に立つて昭和文学も日本浪曼派も見て来ました。ところがこれがたゞ一方の見方であるにすぎないのにだんだん気づいてきました。ともかく貴重な本にふれ得た感謝で一文したゝめました。